

4. きらめく動物たちの命と海 【久保田信の白浜だより(その32)】

“墨”を吐く！ アカダマクラゲ

イカ・タコは敵に襲われると墨を吐き、イカ墨が自分のダミーに対してタコ墨は拡散してめくられます。不思議なことに彼らとは縁のほど遠いクシクラゲ類の中にも“墨”を吐くものがある。それはアカダマクラゲで、古くから知られている。この種は我が国では稀少種で、

正式な記録がほとんどない。しかし、和歌山県白浜町では古くにこれまで3個体の記録がある。白浜町沿岸で1920年頃に1個体と1940年に2個体が京都大学瀬戸臨海実験所の先達の先生方によって発見された。そして、1940年に採取された2個体で日本初の形態の記載がなされた。

それから72年を経過した2012年、9月19日9時頃、白浜町瀬戸漁港で筆者が本種1個体をすくい取った。発見時は満潮で、9月18日までの折からの台風16号の影響で港に吹き寄せせられた外洋性プランクトン（サフィリナという“青コペ”も多数存在）の中に混じってアカダマクラゲは海表面を漂っていた。体長が約5cmほどで、袖状突起を除く本体の長さは35mmだった。体はとても扁平で、幅は10mmもない。

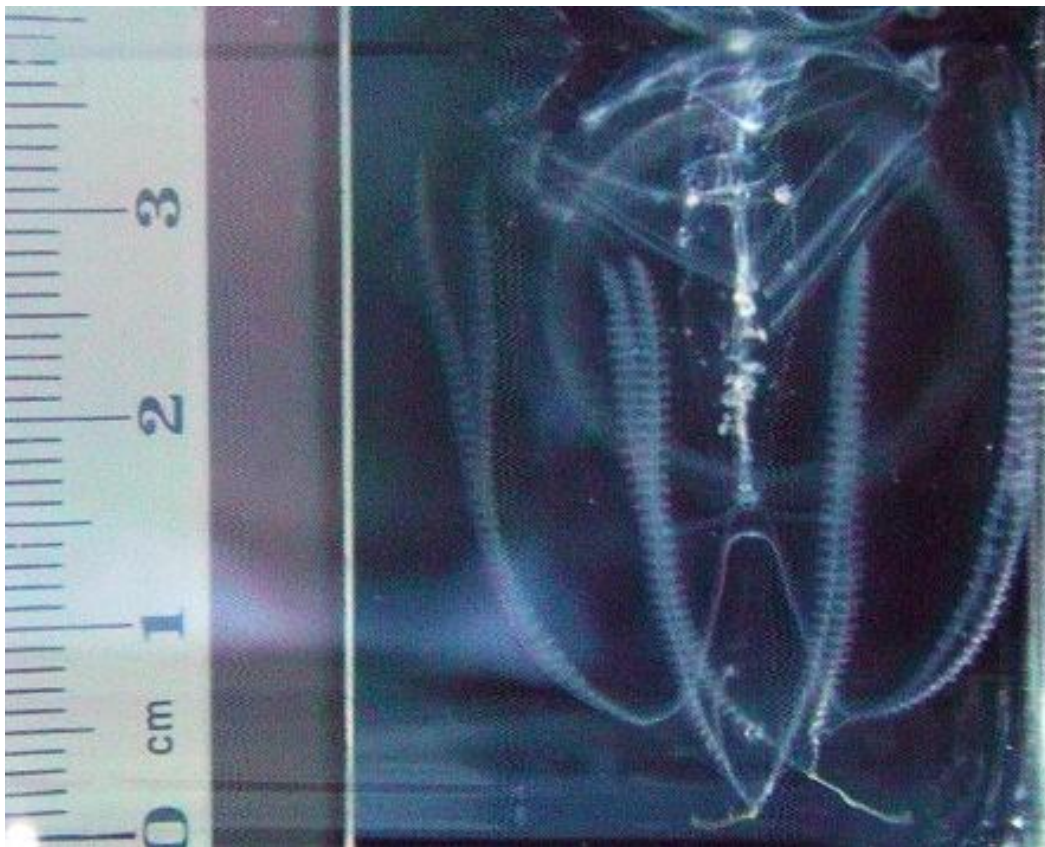


図. 和歌山県白浜町瀬戸漁港で2011年9月19日に採集したアカダマクラゲ（袖状突起は取れている状態）

アカダマクラゲの特徴的な形態は、反口部に三角錐状のゼラチン質突起が2つ向かい合わせにあり、それぞれの突起からは黄色味を帯びたムチ状のものが長く伸びている点である。もしこれがなかったら白浜町が原記載地であるキヨヒメクラゲと一見すると見間違えよう。この独特のしなやかな鞭部を遊泳しながらたなびかせていたので本種と分かった。この長さは今回の個体ではよく伸びて10mm程度であった。このような鞭状構造物をもつシクラゲ類は他にはいない。だが、その機能は未だに不明である。ここには刺胞も膠胞もなく、餌取り装置でないことは確かである。

今回の個体は体を刺激しても、残念ながら“墨吐き”をしなかった。台風の荒波にもまれてインクがなくなっていたのか、使用をめいっぱいしてインクを切らしていたのかもしれない。しかし、袖状突起を切断すると固まったインクのようなものを出した。顕微鏡で拡大して観察すると、そこにはアカダマの名前のもとになったミクロの紅色のインク壺が管にそって多数並んでいた。

筆者は奄美大島で2004年5月に体長8cmの最大個体を採取して本種の“墨吐き”を観察したことがあった。この時も今回と同じく台風で、研究船（広島大学の豊潮丸）で南西諸島を航海中だったが、名瀬港に避難時のめぐり合わせだった。アカダマクラゲを指でつつくと、黄褐色のヨードチンキのようなインクをシュワーと噴射し、60ccの透明な容器の海水をすっかり着色した。クラゲ体に8列に走る櫛板列の各々で、隣り合う櫛板の間に1個ずつ並ぶたくさん紅色の“インク玉”が確認できた。インクはここから数度は噴出された。ちょっとなめるとそのヨードチンキ色の液は苦い味がした。これは自分を死に追い込む毒性があることが、東京シネマのスタッフにより、1975年に江の島産の複数個体で報告されている。従って、アカダマクラゲが害敵に襲われたとき『苦味ある煙幕』を吐き出して、威力を発揮させるのだろう。